

朱夏の女たち
上

五木寛之



新潮文庫

しゅう か おんな
朱夏の女たち(上)

新潮文庫

い - 15 - 24



平成二年三月十五日 印刷
平成二年三月二十五日 発行

著者 五木寛之

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一一

編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Hiroyuki Itsuki 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-114724-8 C0193

江苏工业学院图书馆

新潮文库

藏書章

朱夏の女

上巻

五木寛之著



目 次

第一章	サイベリアン・エキスプレス	七
第二章	インドへの旅	二八
第三章	榛名朋子の性的反抗	一〇四
第四章	井上樹理の不安と夢	一二六
第五章	笙七重の大胆な野心	一四五
第六章	幸福という名の鎖	一六五
第七章	著名作家との一夜	一八六
第八章	マセラティに乗った青年	二〇七
第九章	愛でなく遊びでなく	二三〇
第十章	女が男を誘惑する時	二五三

朱夏の女たち

上巻

第一章 サイベリアン・エクスプレス

プリンターから乾いた音とともに吐きだされる印刷原稿をとりだして枚数をかぞえ、クリップでとめると、笙七重は大きく両手をあげて背伸びをした。

瞼の裏に、かすかな涙の感触があった。

——疲れたなあ。

このところ、根をつめて何時間もワープロのキーを叩いたあとは、いつもこうだった。いくら高解像度ディスプレイとはいえ、鋭く光るグリーンの文字を凝視しつづけたあとは、頭の芯に火照るような疲労が残る。

七重はフロップピーのレバーをもどし、電源を切った。軽い音とともに画面から蛍光の点が消え、さつきまで生きもののようには働いていた機械の鼓動がとまった。

七重はその瞬間が嫌いだった。スイッチを切ると同時に、あれほどの能力をもつワードプロセッサが、たちまち灰色の鉄の塊になってしまう。なんだか指先ひとつで物の命を断つような、どことなくとましい感覚がその操作にはある。

いつかそのことを村木映子に言ったら、笑われてしまった。

「それは逆なんじゃない？ 本当はわたしたちのほうが、機械に使われてるような気がするけど」

そう彼女は言ったのだ。

たしかにそうかもしれない、と、七重も思う。その証拠に、ひと仕事おえて、こちらがこんなに疲労困憊こんぱいしていても、ふたたびスイッチさえおせば、相手はふたたび何十時間でも平然と働きつづけることが可能なのだから。

七重は両手の指の腹で、目の上を指圧するようにおさえた。そんな自分の姿は、他人の目には、背中をまるめ、手で顔をおおって嗚咽おえつしている老女の姿のように見えるのかもしれない、と、ふと思った。

彼女は頭をふって顔をあげた。壁にはつてあるアントニオ・ガウディ展のポスターへ視線を向け、自分はまだ若いのだ、と考えた。

——若い？ 本当にそうだろうか。

古代の中国人は、人生を四つの季節にたとえたという。

「青春せいしゅん」、しゅか「朱夏」、はくしゅう「白秋」、そして「玄冬げんとう」。

七重はそのことを思い出した。三十四歳という年齢は、当然のことながら「青春」などという気恥ずかしい季節からは、はみだしている。といって、「白秋の女」、というほど透明な

気分でもない。

——朱夏のひと。

と、という言葉が頭の奥のスクリーンに横書きの緑色の活字で浮かびあがった。〈ひと〉という仮名を漢字に変換しようと、無意識に指がうごいた。仕事を終わっても、まだ体には余熱がのこっているのだろう。七重はため息をついて椅子から立ちあがった。

「終わったの、ナナエ」

部屋にひとつしかない窓のそばの机で、分厚い広辞苑をひいていた村木映子が顔をあげて声をかけた。

「うん、とりあえずね」

「じゃあ、こっちへちようだい。私がざっと目を通して、トシちゃんに帰りがけに創潮社にとどけてもらうから」

映子は辞書をとじると、七重のデスクのところへやってきた。遠近両用の眼鏡をかけ、カリー・ヘアの頭にトレーナーの上下という映子の恰好は、どう見ても性別不明といった感じだ。

彼女は七重より十歳ほど年上で、四年前に女性だけ三人のグループではじめたこの速記事務所の代表者である。以前に私立女子高の教師をやっていたという話をきいたことがあるが、七重と知りあったときは神保町の小さな出版社で編集の仕事をやっていた。やがてその出版

社が不渡りを出し、映子はしばらく失業保険で食いつないだ後に、この〈ヘオフィスQ〉という速記事務所を創立した。

七重とは、映子の編集者時代につきあいがはじまっている。ほぼ六年ほど昔の話だ。

「最近どうも目が疲れてしかたがないの」

と、七重は原稿を映子に渡しながら言った。

「なんとかアンバー・イエローのディスプレイを入れられないかしらね」

「IBMにでもご相談あそばせ」

映子は印刷された原稿に目を通しながら、肩をすくめた。七重はかまわずに、

「それに専用の車も必要だわ。あがった原稿をいちいち地下鉄乗りついで出前してたんじゃ、仕事にならないもん」

七重の言葉に映子はうなずいて、

「うん、わかってる。でもね、ナナエ」

「いいの。要求してるんじゃないから。ただ希望をのべただけ」

「絶望の虚妄なること希望に同じ、よ」

映子は昔から口癖の魯迅の有名な言葉を呪文のようにつぶやくと、自分の机にもどって原稿をめくりはじめた。

「古いんだから、もう、社長は」

七重は日にいちどはきかされる映子のその大好きな文句に、ちよつとうんざりした気分のため息をついた。

「どうしてこの部屋には、窓がひとつきりしかないんだろなあ」

「家賃が安いからね」

映子の答えはいつも明快だった。そしてそれは常に正しい。はじめのころ、手書きの速記だけでやっていた頃にくらべると、三台のワードプロセッサを使うようになった今は、たしかに仕事の範囲はひろがっている。しかし、そのための経費も、また馬鹿にはならなかった。

都心から離れた私鉄沿線の裏通りに、バイク屋のガレージの二階を借りてへ有限会社・オフィスQの看板を出すだけでも、かなり大変なことなのだ。陽のあたる大企業のOLみたいな贅沢が許されないくらいのことは、七重にもよくわかっていた。しかし、それでもなお、七重はなにか自分の今の生活について納得のいかないところがあった。床の下から響いてくるバイクのエンジン音や、焦げるオイルの匂いなどが彼女は嫌いだ。昼間から蛍光灯の白い光の下で、何時間も、ときには徹夜で髪をふり乱し、血走った目を光らせながら機械と向きあっている生活だけが、自分の生き甲斐とは思えない。こんなふうにして今日まで、三十歳から三十四歳までの人生が過ぎていったことが七重には口惜しかった。そしてこれから先もずっと窓のひとつしかないこの部屋で、自分の三十代の時間がこのまま流れてゆくこと

を考えると、体から力が抜けてゆくような気がする。

「ナナエさん、電話とって」

こちらに背中を向けて座談会のテープ起こしをやっている水守敏江が、肘で受話器をおしやって言った。彼女は急ぎの仕事で、朝からずっとキーボードを叩きつづけていた。デスクの下で録音再生用のボタンを足で操作しながら、彼女はミシンの手内職でもやっているような風情で仕事に没頭している。

「ごめん」

七重は手をのばして受話器をとった。

「はい。〈オフィスQ〉です」

「ナナエでしよう？ 声ですぐわかるわ」

太い男の声のようなアルトだった。向こうの声のほうがよく特徴がある。それは七重の十年ごしの〈信友〉、井上樹理の声だ。

彼女はかつて高校生のころ、テストの答案に〈親友〉と書くべきところを〈信友〉と書いて教師を嘆かせたという伝説の持ち主で、そのエピソードをきいて以来、七重は彼女のことを〈信友ジュリ〉と呼んでいた。中学生時代に水泳の選手で活躍したこともあるというスポーツ万能の悪友である。

「しばらく、ジュリ」

「仕事、いそがしい？」

「うん。まあまあね」

「そう」

樹理はちよつと言葉を切つてひと呼吸いれた。受話器の向こうでリズム楽器の音と、外国語らしい男たちの声が、かすかにきこえた。

「じつは、今夜、〈信友会〉をやるうと思ふんだけど」

「え？ 今夜？ ずいぶん急な話じゃない。どうしたの？」

〈信友会〉というのは、樹理と七重、それにもう一人、榛名朋子^{はるなともこ}という仲間が、月に一度くらしいのわりで集まる雑談の会のようなもので、彼女たちが知りあつてからずっと続いている気楽なパーティーだった。これという決まりもなく、成りゆきでやってきたのだが、それがかえつて永続した理由だったのかもしれない。さつき電話かけてきて、そういうのよ。な

「じつは、トモがぜひ話したいことがあるつて。さつき電話かけてきて、そういうのよ。なんだかふだんとちがう雰囲気^{かんいき}でさ」

「へえ。トモがね」

「うん。いつも無口なあの人、へんに早口で、強引なのよ」

「いいわ。何時にどこで？」

わたしの店に六時、と、樹理は言った。

「夕食おごるわ。たまには和風の小座敷なんかどう？」

「悪くありませんねえ」

「じつは——」

樹理の声がすこしひくくなった。

「わたしのほうにも、ちよつとご兩人に話しておきたいことがあるんだ」

「話ねえ。例のスウェーデン人のエンジニアとは、もう切れたんでしょ？　こんどはどこの人？」

「ちがう。ちがうったら。もっとまじめな話よ」

「そう。ごめん」

「まあ、どうせわたしのことだから、ナナエにまともに取り合ってもらえないとは思うけどね。あとで話すわ。今夜、すこしおそくなってもいいんでしょ？」

「そのつもりで行くわ。じゃ六時に」

「はい」

電話は向こうから切れた。

——なんだか変だな。

七重は受話器をゆっくりもどしながら、首をひねった。

いつもなら、オーケイ、とか、ウィ・ダコールとか、弾むような調子のいい電話の切りか

たをする樹理なのに、いま彼女はたしか、〈はい〉と、しおらしく言ったような気がする。

——なにがあったんだろう？ それにトモの急用というのは一体なにかしら。

七重はスチール製のデスクの端に、黒のコーデュロイのパンツに包まれた少年のような尻をのせたまま、〈信友〉の一人である榛名朋子の童女めいた横顔を頭の中に思いえがいた。

「またあの人たちと会うの？ ナナエ」

と、ぼんやり考えにふけっている七重に映子が声をかけた。

「うん」

「わたしにはどうしてもわからないのね。あんたみたいな地味な人が、どうしてあんな女たちとつきあっているんだろう。不思議でしかたがないわ」

「わたしもよ」

七重が笑って言った。映子は呆れたというように頭をふると、

「片方は国籍不明みたいな遊び人で、もう一方は絵に描いたような有閑マダム。あんたとは生活水準も、知的水準も全然ちがう人たちだもの」

「うん。ひょっとしたら、そうだからうまくいってるのかもしれない。わたし、自分に似たタイプの人たちって、苦手だもん」

「そういえば、木崎青年って、あんたに似てたわね。いい人だったけど」

「いいの。そんな昔の話」